

迷ひ迷ふ避暑地の地図の大雑把

朝田玲子

廃線のモノレール伸ぶ秋の空

齋藤亜矢

旅芝居はねて役者と秋の月

福のり子

けふ誰か誉めてやりたし草の花

鈴木大輔

稲束を供へ茶会の始めとす

河村純子

月光や手摺子の影くろぐると

小寫 和

蝸や机に本をどかと置き

加藤 剛

一片の雲なき二百十日かな

有岡萃生

爽やかや点字の構内案内図

伊東弥生

阿弗利加に送る泡盛六十度

大石高典

音無の滝に音あり野分去る

栗本徳子

会場へ虫の音のある大広間

片山旭星

駅弁の隅にぎんなん行儀良く

谷口文子

故郷や今も昔も鰯の群

田中 勝

一献の良薬に酔ふ菊の宴

津嘉山典

蛇口より雫の落つる虫のこゑ

碓氷芳雄

白むくげ少女の刻は短くて

田崎セイ子

三枚に下し秋刀魚の売られをり

中島冬子

引くことなき芥語の辞書や秋の暮

牧田満知子

氷室集

虫の夜や甲骨文字を石に彫り

昌山瑠美子

夜の秋やテラスに残る火消壺	朝田玲子
沖を向く無宿の墓へ秋嵐	加藤広文
月明や五百羅漢の眼差しに	福のり子
併設のカフェを目当ての美術館	有岡萃生
秋草の籠様々な仏間かな	河村純子
びいひやらと渋谷駅前秋祭	小畠和
秋声や擦れば燐寸の火がにほふ	鈴木大輔
秋曇ゆつくり注ぐミントテイ	宮坂美緒
阿蘇は千里臥牛のなかの草泊	瀬崎るみ子
風捕へ伊良湖水道鷹渡る	石上敦子
午後八時貴船の溪にやつと月	鳥居裕子
潮速き駿河湾より鱒を抜く	大石高典
虫売と伝書鳩屋の中国語	寺川貴也
ねぼけ堂名のごと秋の風が客	片岡和子
山へ山へ雲の流るる秋の夕	加藤剛
水戸殿の御世より咲きし萩の花	高松房子
長編を読み終へ夜長はじまりぬ	片山旭星
夕月や原生林に獣の目	柳堀悦子
片貝の波に寄せられ秋の暮	小堀尚美

空つぼの蔵の広さや土用干	河村純子
土用芽や庭師きりりと足袋脚絆	朝田玲子
黙禱の朝に途切れし蟬時雨	福のり子
夜の秋やビルの灯りのふつと消え	加藤 剛
夏足袋や畏れつつ踏む能舞台	谷口文子
蜻蛉群る伯耆国の墳丘墓	齋藤亜矢
三巡目の真似上手なり盆踊	佐藤慎一
送火待つ糺の森の古書市に	中島冬子
炎天や被爆ドームの影の揺れ	碓氷芳雄
アロハシャツ似合ふ夫婦に瀬戸の風	田中 勝
あてがひの客間に眠る盆帰省	有岡萃生
島の子に海月を避くる知恵習ふ	大石高典
鈴虫の窓辺の声よ眠らうよ	福江ちえり
太陽の重たく沈みゆく残暑	片山旭星
黄昏の祭へ向かふ下駄の音	津嘉山典
人型の石にうする炎暑かな	田中白秋
グラス触るる音はもしやと鉦叩	鈴木大輔
導火線ありせう黒き西瓜玉	片岡和子
「平和つてどこから来るの」原爆忌	伊東弥生
金山の遺跡を高く赤とんぼ	氷室集
鐘の音の消えゆくまでを晩夏光	加藤広文
磯蟹の無賃乗船見つけたり	朝田玲子
	昌山瑠美子

子を護りし祖母は帰らず原爆忌	寺川貴也
草刈の音に草の香負けてゐず	宮坂美緒
さわさわと茶漬飯なり秋の水	福のり子
貝塚のねむる地層へ秋日射	津嘉山典
秋扇閉ぢて碁敵帰りけり	有岡萃生
貫入の音ちんちんと秋立ちぬ	谷口文子
篠笛の音に竿燈のやつてくる	柳堀悦子
黄鰯魚鳴く音の川面まで宵の口	大石高典
朝に帰る猫のしつぽのゐのこづち	小堀尚美
雲海や高野の山にひとり立つ	加藤 剛
和菓子屋の今日を限りと大文字	河村純子
ペンギンの突つ伏してゐる残暑かな	鈴木大輔
一杯の水飲み干して広島忌	高松房子
太撥の津軽じよんがら秋の雷	細見昌代
真つ先に蜻蛉の来たり吾が新居	矢野裕俊
製紙所の煙流るる初秋かな	石田信之
夏草やいつのまに手のかすり傷	杉浦康子

氷華集

2025年10月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

白めだか雌の見分くる面構へ	朝田玲子
喪の家や泰山木の花の白	福のり子

象の子の足跡ひとつ緑蔭に

大石高典

マカロンのやうなる蜘蛛の太鼓かな

齋藤亜矢

買ひ立ての男日傘を目深にて

有岡萃生

涼風や抜け道を抜け坂の下

小嶋和

キャンプの火ドヴォルザークの曲に消ゆ

中島冬子

第二ボタン無き学ランの黴ほのか

加藤剛

梅雨に入る癖毛にうねり出てきたり

伊東弥生

頭より喰らうてみたき鮎届く

牧田満知子

隣人のかくもゐたるか溝浚へ

富沢壽勇

船渡御の船や水上薪能

河村純子

冷房の効く図書館によく眠り

福江ちえり

野面積の参道長き蟬時雨

片山旭星

如意棒のごと片蔭の帰り道

田中勝

酒蔵の香や白壁の片かげり

碓氷芳雄

夏の日や「命どう宝」願ひけり

津嘉山典

命（ぬち） どう宝（たから）

サラダ菜のほんのり苦し半夏生

森 壹風

草の香に空の広がる蜻蛉かな

鈴木大輔

氷室集

両横にて稚児の汗拭く男衆

昌山瑠美子

茅葺らしや慎重に餌つつきををり

朝田玲子

雷干に相性のよき土佐酢かな

鳥居裕子

逸る子の父呼ぶプールなかばより

寺川貴也

犬駆け寄る入道雲の潦

宮坂美緒

顔の見へぬ戦争の国夏の果

福のり子

野分外れ眠り深きに地震の来

小嵐 和

昼顔や流人のやうに沖を向き

加藤広文

腰細き浴衣の帯に鉦袋

細見昌代

消え去りし野分再び島に来て

大石高典

お手伝ひポイント制の夏休

伊東弥生

高山の麦酒たちまち酔ひ回る

河村純子

大夕立眺めてゐたるひとりつ子

有岡萃生

虹消ゆや街へ海風吹きはじめ

津嘉山典

鉄橋に迫るや梅雨の大和川

加藤 剛

八十年祈りの中の蟬時雨

田中 勝

鳥どもの影は地を這ふ炎暑かな

鈴木大輔

夕立や傘ひとつ持ち駆け来る子

鈴木さやか

解体の鉾綱ずしり雨ふふむ

柳堀悦子

葛切や昔話を添へてをり

中井昭雄

氷華集

2025年9月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

蓮浮葉水玉ふたつ空ふたつ

福のり子

夏めくや変形菌の昨日今日

齋藤亜矢

渾身の体当りにや鮎の傷

朝田玲子

陶祖の碑あり万緑の音羽山

谷口文子

丁寧にたたむ朝刊沖繩忌

有岡萃生

土地の名に水の名残る蜻蛉かな

鈴木大輔

群島へ高速艇よ南風吹く

小嶋和

天気図の絵柄の切手迎へ梅雨

加藤剛

マンゴーの落つれば子らの走り寄る

大石高典

潮の香のふふむ風あり梅雨晴間

津嘉山典

万緑や加茂の源流祀る寺

片山旭星

行灯を回せば羽蟻動き出し

牧田満知子

空海の岩屋にかかる夏怒濤

田中白秋

猫の伸ぶ主も伸ぶる夏座敷

碓氷芳雄

浅間神社茶屋の一息一夜酒

丹羽康夫

綴葉装書庫に匂へる梅雨入かな

福江ちえり

戻り道の闇やはらかし蛍籠

田崎セイ子

訪なへば玄関に待つ素足の師

伊東弥生

直会の酒の香に和す茅の輪の香

片岡和子

氷室集

その瞬間見定め逃ぐる山棟蛇

福田将矢

井戸掘の男ごろりと三尺寝

大石高典

五線譜のごと蔓薔薇の垣根かな

宮坂美緒

せはしなく暮るる日数よ牛蛙

寺川貴也

阿闍梨さま京へ降り行く青葉道	昌山瑠美子
爪の色とりどり素足投げ出して	小寫 和
土器投げ海へ迫り出す濃紫陽花	朝田玲子
茄子苗にやうやう小さき一番花	福のり子
川蜻蛉川を離れぬ川の風	鈴木大輔
柏手にびたりと止んで河鹿笛	鳥居裕子
日覆の下に暇なく自転車屋	有岡萃生
青梅の重たき程の青さかな	中村淳子
湿りある貴船の茅の輪潜りけり	柳堀悦子
薫風や永字八法くりかへす	津嘉山典
帰去来と老鶯を聞く異郷かな	加藤広文
叢に紅を差したる梅雨茸	石上敦子
風荒ぶ町の外れや梅雨の月	加藤 剛
夏至の日の門扉に水を荒使ひ	福江ちえり
起業家の声よく通る半夏生	佐藤慎一
風薫る比叡を望み鞍馬寺	片山旭星

氷華集

2025年8月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

畏るるは全かりける蛇の衣	福のり子
パセリ苦し明日退職を告ぐと決め	有岡萃生
蛇の子や水引ほどのとぐる巻き	齋藤亜矢

掛替ふる節句の軸や薫衣香

朝田玲子

台湾の旅へ早めの更衣

小島 和

ぐんにやりと釣針を曲げ菜種河豚

大石高典

雑草と言はずわけても母子草

谷口文子

琉球のしきたりにあり噴井あり

津嘉山典

あしたには月の雫や藤垂るる

田中白秋

八代目を一目と日傘埋めつくす

牧田満知子

吾の生家は子の生家なり夜の新樹

鈴木大輔

軒端まで来てゐる蜂の脚長し

加藤 剛

ハンカチの木の花そろと押し花に

富沢壽勇

スカラベのピアスの青さ夏来る

福江ちえり

魚焼いて五月の空を汚しけり

片岡和子

原爆の子の像の辺に薔薇の風

田中 勝

新緑の波や通勤バスの風

碓氷芳雄

風薫る嵯峨野の奥へ石畳

片山旭星

新緑の香りをつれて帰宅せり

石原ゆき子

蟻の巣の間取に住んでみたきとも

有岡萃生

桜桃の熟れぐあひ待つ鳥と吾と

朝田玲子

降り立てば蛙合戦関ヶ原

昌山瑠美子

階へぼつりぼつりと青時雨

宮坂美緒

氷室集

武者人形再び飾る日の来たり	鳥居裕子
行者大蒜つんと香のたつジェノベーゼ	福のり子
御輿入のかしらは絹の法被着て	小嶋和
卯の花の零るる雨後の小道かな	谷口文子
日中を春告鳥と過ぎしけり	加藤剛
悠然と暗き茂みへ春の鹿	寺川貴也
仏桑花印度更紗の店の前	石上敦子
風と光とけあふ夏の渚かな	津嘉山典
峰々の雪形のみな失せてきて	加藤広文
茶農家の一と日仕舞ひの新茶かな	伊東弥生
夏近し海岸線を走る汽車	片山旭星
学生のカタカナ氾濫新樹光	福江ちえり
陽炎を抜け出て終の札所かな	田中白秋
熱の子に枇杷熟るる窓閉ざしたり	鈴木大輔
田植して若狭は空も潮ぐもり	中村淳子
薔薇挿さむ笏谷石の青き壺	坂利美

氷華集

2025年7月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

朧夜の父命日の竜頭巻く	福のり子
水中の泡は縦巻き渦見船	朝田玲子
水田の中の古墳や花盛り	齋藤亜矢

藪影にボールがひとつ春の雨	加藤 剛
青鯿をてつぱいと書き京の店	小 篤 和
車屋の落ち合ふ枝垂柳かな	有岡萃生
茶畑へ覆ひ懸けたり風なき日	中島冬子
重ねたる酒樽六つ春の風	田中白秋
春あけぼの一番鶏のこゑ長き	津嘉山典
鎧戸の重き昭和の日なりけり	鈴木大輔
遠足の列や二の丸三の丸	福江ちえり
銭湯の主も老いたり目借時	大石高典
わらび摘む子の歓声も籠に入れ	田崎セイ子
立ち上る護摩の炎の梅若忌	富沢壽勇
胸を張り桑名の産と蜆壳	谷口文子
葬儀屋と知らず軒端へ燕の来	河村純子
春の日や花びら色の砂糖菓子	片山旭星
被爆の無念込めし筆墨春の雪	碓氷芳雄
名を添へて飾る野の花あたたかし	伊東弥生
一生はあつといふ間よ山笑ふ	福のり子
廃線の碓氷峠や草青む	朝田玲子
焼きたてのパンの香こぼす花の雨	宮坂美緒
先頭の鈴に癒され遍路道	鳥居裕子
	氷室集

焼き立ての食パンちぎる花の昼	小嶌 和
シードルの泡のはかなし三月尽く	大石高典
若武者の腰に水筒春まつり	伊東弥生
山門へ響き合ひゐる遍路鈴	田中白秋
自作なるメビウスの帯春ともし	加藤 剛
霧島の桜の向かう桜島	寺川貴也
雲の影雲より速し山笑ふ	有岡萃生
卵よりつんと飛び出す蛙の子	小堀恭子
やんややんやと西大寺大茶盛	丹羽康夫
白詰草踏まれて強し赤子泣く	河村純子
春や春海抜ゼロの貨物駅	細見昌代
石くれを光らす雨や桜草	鈴木大輔
春昼や方丈前に笠二つ	石上敦子
積奠や樹林真中の孔子像	富沢壽勇
蛭買ふ蛭好きなる子がひとり	谷口文子
剪定の松の香るよ城の門	福江ちえり

氷華集

2025年6月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

金碧の鹿の瞳や猟名残	齋藤亜矢
キジムナー隠れし大樹鳥雲に	大石高典
億年の進化のかたち水草生ふ	朝田玲子

身ほとりに耳済ましめる春の闇

小寫 和

まんまるの神馬の草履山笑ふ

伊東弥生

田楽や客を同志と呼ぶおやぢ

有岡萃生

島人に海峡閉ざす春疾風

片岡和子

角帽を投げ上ぐるこゑ風光る

碓氷芳雄

山寺へつらつら椿つらつらと

中島冬子

如月や山に色濃き尾根の筋

加藤 剛

失せ物は失せしままなり野蒜摘む

鈴木大輔

無くなりし迷子放送梅若忌

河村純子

初鯉迷悟の笠を脇におき

田中白秋

御神木のしめ縄白し春日差す

片山旭星

無鄰菴の馬酔木や陰のどつしりと

谷口文子

揚雲雀砲は大地を揺るがしぬ

牧田満知子

工場の昼を灯して残る雪

福江ちえり

足裏へ地熱伝はる木の芽時

津嘉山典

五体投地振動直に修二会かな

丹羽康夫

氷室集

日に三度ぜんまいを揉みまた干して

鳥居裕子

多喜二の知らぬミモザを仰ぎ志賀旧居

宮坂美緒

寒戻るパンダグラフの火花かな

大石高典

日曜や湯殿の窓の暮れかぬる

朝田玲子

樹冠より響く雪解け間近なり
寒明の山ことさらに尖りけり
天平の塔にかかる寒月光
石巻港の朝市若布買ふ
迷子札しつかと付くる梅若忌
シナモンの香りの朝や春の雨
三月の歌舞伎や黒衣若きとも
堂の軒に音符の如き氷柱かな
鶏小屋を狙ふ鼬や月朧
行く春や土駄引馬の背の温み
六甲や春三日月の影深し
春愁や頬杖つくによき高さ
主菜にはならぬ主役の木の芽和
ワイシャツにほのと残りし花見の香
いかなごの不漁を嘆く魚の棚
知らぬ間に龍馬に恋す菜の花忌

加藤 剛

加藤広文

田中白光

小 崙 和

河村純子

鈴木大輔

谷口文子

松村滋子

柳堀悦子

坂岡隆司

寺川貴也

有岡萃生

石上敦子

碓氷芳雄

土居郁雄

山本京子

氷華集

2025年5月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

街路樹に地衣のくきやか春の雨

齋藤亜矢

菰ぬちに斑ら日の揺れ冬牡丹

朝田玲子

春の宵あしたの雨の匂ひとも

小 崙 和

うりずんや鍋一面のゆし豆腐

大石高典

雪沓の田の面を駆くるランドセル

福江ちえり

歯の抜けし子の駆け出しぬ風車

鈴木大輔

新雪や蹄二の字の跡を追ひ

福のり子

初蝶や遠くに光る吉野川

田中白秋

恋すてふ我が名は猫よ春の風

川村純子

清水の舞台や春の雪しまく

谷口文子

寒泉や三つ二つと泡を生み

加藤剛

春立つや両隣よりカレーの香

有岡萃生

あぜ道に息青みけり水の春

牧田満知子

馬車道の松や離宮の風冴ゆる

片山旭星

春一番空にはりつく島の鳥

片岡和子

岩海苔や能登の隆起の岩場にも

中井昭雄

碧天へ円周ひろげ春の鳶

津嘉山典

卒業の娘の袴かかる部屋

碓氷芳雄

声高く数へて百のふきのたう

伊東弥生

冬の浜拾ひし貝に風の音

加藤広文

立春やきのふの豆に雀の来

小嶋和

吹きさらしの地に苗札のゆるぎなく

朝田玲子

亡き人は亡き人のまま梅白し

鈴木大輔

氷室集

コート買ふ名のみの春を待ちきれず

福のり子

あたたかや懐紙にほどくこぼれ梅

牧田満知子

風花や手に熱すぎるココア缶

宮坂美緒

冬空の青し真白き比良の峰

片山旭星

源氏より平家が好きと春三日月

河村純子

白息や記憶の奥の大地震

寺川貴也

入学や榆の大枝天を指す

坂岡隆司

科学研究費の皮算用二月尽

大石高典

早春や山鳩は喉ふくらませ

谷口文子

収穫の港賑はふ若布かな

田中 勝

雪解水飲む猫のゐて日の高し

昌山瑠美子

水灌菜富士の恵みといただきぬ

丹羽康夫

大阪に残る寒さのはや五日

加藤 剛

涅槃図に猫をらぬわけ通訳す

有岡萃生

立春や鬼のパンツを繕ひぬ

伊東弥生

春雨の傘をくるりと金曜日

石上敦子

氷華集

2025年4月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

御降りのみゆく能登の土赤し

福江ちえり

冬三日月きりりと疼く胸の傷

福のり子

阿弓流為の首あると言ふ冬日向

有岡萃生

寒暁や箆笥の揺れの記憶あり

加藤 剛

淑気満つ横たふ馬の深軒

朝田玲子

初旅の雲低くなり重くなり

小 崙 和

万両の赤や離宮の空広し

田中白秋

翁飾そこに年明け能舞台

河村純子

家なれどいつもと違ふ雑煮かな

齋藤亜矢

箸紙や欠けることなく名を連ね

谷口文子

初旅やうちなんちゆうの温かき

大石高典

をちの灯の小さく大きく冬の波

牧田満知子

牡蠣小屋の音や待ちゐる家族連れ

田中 勝

冬深し象舎に象の籠りゐる

碓氷芳雄

鯛焼や散歩がてらに寄る屋台

中井昭雄

爛酒を酌む後書を読み終へて

片山旭星

狐面の稽古を重ね里神楽

富沢壽勇

冬麗の月を残して星去りぬ

津嘉山典

恵比須大黒大漁の初神楽

丹羽康夫

氷室集

氷見沖へ鳶の出てゆく冬日和

福江ちえり

裸木の凜と立つとき阿修羅めく

福のり子

台湾やランタンの絵の初電車

小 崙 和

枯芝の光に埋もれ猫は野良

朝田玲子

なかなか鳴らぬ指笛虎落笛
海鼠ひよいと袋へ収め露店商
去年今年味濃くなりし中味汁
鮫鱈の肝買ひ酒をまた買ひぬ
寒晴や母の在せば鶴折らむ
寒禽や土塀の続く宿場町
書初の一面どれも尻上がり
幼な児のつぶやきをメモ春隣
たたなづく青垣かくし時雨雲
寒風に耐へたる幹の細きかな
熱の身の馳走はこれぞ昼の雪
飲み頃に炭酸効かせ年始酒
やんばるの島の野生のみかんとや
山眠る杉の木立は色淡し
小正月と留学生におぜんざい
母いつもの手際によさや七日粥

大石高典

鳥居裕子

福田将矢

鈴木大輔

加藤広文

牧田満知子

有岡萃生

伊東弥生

津嘉山典

加藤 剛

河村純子

丹羽康夫

昌山瑠美子

片山旭星

谷口文子

宮坂美緒

氷華集

2025年3月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

寒月と声交し合ひ一人旅

福のり子

東の間の夕日や小歩危駅の冬

小 崙 和

しはぶきはコソコソと言ふ森の民

大石高典

おかぼ煮る冬至の習ひ婆ちゃん子

中島冬子

冬日射す父の亡骸母に寄せ

加藤 剛

夕暮の町や鮑が辻に消ゆ

齋藤亜矢

夜鳴蕎麦その辻あたり曲がり来よ

有岡萃生

消えかかる措辞追ふ朝の蒲団かな

朝田玲子

山門を出ればこの世の天高し

田中白秋

爆弾を箸に真二つ関東煮

福江ちえり

冬の夜や遺品となりし馬上杯

片山旭星

冬の夜や少し安堵の脈を取る

河村純子

核検査室鉄扉なり凍つる朝

牧田満知子

底冷や地に十字切る無言館

富沢壽勇

望遠鏡に踏台を置き冬銀河

森川恵美子

牡蠣剥くや波形の殻へナイフの背

鈴木大輔

夫へ入浴介助を受けて冬至の湯

大野千鶴子

春待つやオスロの夜の平和賞

田中 勝

肖像画のモデルに老いの秋思かな

植田清子

氷室集

登校の子は見逃さず初氷

朝田玲子

枯菊を焚く「高砂」を謡ひつつ

加藤広文

いくたびとなく降り来たり木の葉雨

加藤 剛

水鳥の群れゐる塩田跡地とや

小嶋 和

足跡を追ひつ逃しつ雪の獵

昌山瑠美子

おかへりと言ひ合ふけふのおでんかな

鈴木大輔

江戸普請四谷塩町寒の雨

牧田満知子

笈摺のうしろ姿や初しぐれ

田中白秋

寄鍋の湯気の向かうや父百歳

河村純子

犬の尾のゆらと飛びだす芒原

宮坂美緒

文旦をいただく仲となりにけり

有岡萃生

木版の二色に刷るも悴みて

谷口文子

冬空や触腕長き烏賊を釣る

大石高典

礼拝へ白のセーター新しく

福江ちえり

餅搗の臼に湯気立つ香り立つ

田中勝

正月の凧や鉄橋ゆく列車

碓氷芳雄

鼓の音肅々として能始

國兼弓華

年越すや青空に魂返したり

原順子

虎落笛寝つけぬときの部屋広し

小堀尚美

マホガニーのピアノ遺せし冬館

富沢壽勇

氷華集

2025年2月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

乾眠するとや熊虫に空つ風

朝田玲子

チャート層剥き出しの崖山粧ふ

齋藤亜矢

冬ぬくしひと間に過ごす赴任先

有岡萃生

蓮根の十個の穴に十の謎

谷口文子

けふ無事にあること蕪の丸きこと

鈴木大輔

後継がずと言ひ捨つる子よ柿赤し

河村純子

托鉢の来ること谷戸の名の木枯る

片岡和子

葬列や鳥の渡りを追ふやうに

福のり子

煤逃の口実いまや尽きかけて

城戸崎雅崇

子を傘へ父は濡れ身の初時雨

中島冬子

風邪籠る三日ミイラとなる思ひ

大石高典

立冬や紺ひと筋の水平線

福江ちえり

樹より樹へ鳥の突き抜け暮の秋

加藤 剛

閑かなり寄するも引くも秋の潮

津嘉山典

冬鷗群れ来るときや能登の海

中井昭雄

秋あかね刈り揃へたる小柴垣

牧田満知子

鳩笛は日暮の音色暮の秋

片山旭星

被爆地の冬の灯し火平和賞

田中 勝

鍬のおと等間隔の冴ゆる朝

碓氷芳雄

真ん前は闇の岬や星流る

氷室集

風の棲む島や冬木の曲り立つ

加藤広文

虚子文学館その先の秋の浜

片岡和子

なほ残る渋谷の路地や石路の花

宮坂美緒

朝田玲子

月満ちて杜に暗がり生まれけり

田中白秋

小春風ひねもす磯に根魚釣る

牧田満知子

白足袋に足の冷たし能役者

河村純子

いたづらに明るき駅舎冬の暮

大石高典

鉄塔を等間隔に山眠る

有岡萃生

駆け降りる影と纏るる落葉山

鈴木大輔

間に合はぬ夜となりにけり冬支度

加藤 剛

栗踏めば縄文のこゑ聴へたり

津嘉山典

夜神楽へ面を掛けたり控室

丹羽康夫

祖母の縫ひし綿子の重さ懐しく

石上敦子

機関士一筋勤労感謝の日

山本京子

手の甲の少しひりひり冬初め

谷口文子

隆起せし奇岩に冬の落暉かな

柳堀悦子

懸崖菊百の手遣ふ菊師かな

高松房子

菰卷や庭師の太き無骨の手

幸城麗子

円空の墓つづまやか木の葉散る

小堀恭子

氷華集

2025年1月の雑詠から尾池和夫抄出

氷壺集

十六夜の火山湖に跳ね魚の音

齋藤亜矢

秋霖や椅子にたれかのゐし温み

朝田玲子

閑けさや樹海の底へ落葉道

伊東弥生

街道の先より暮れし曼珠沙華

有岡萃生

書き込みの多き本読む源義忌

河村純子

秋風や透きとほりゆく大伽藍

田中白秋

踏み鳴らすは秋の天狗や能舞台

谷口文子

茶畑の敵とばかりに零余子採る

中島冬子

名月を背伸びして見る心地かな

加藤剛

揺るるものばかりを揺らし秋の風

鈴木大輔

移住とて移民のごとし十三夜

片岡和子

献杯の後に間のあり秋の暮

佐藤慎一

野葡萄の触るるばかりや柚の道

牧田満知子

影踏みに大人が興じ後の月

福江ちえり

つちのこや腹に重たき夜食摂る

大石高典

年縞に気候変動知る秋気

津嘉山典

道なりの等々力溪谷照紅葉

富沢壽勇

白樺や音無き道の秋のいろ

田中勝

子へ宛名書く小包や柿の秋

碓氷芳雄

氷室集

角切られ安堵のやうに鹿の去る

河村純子

かけつこに負けて山盛り栗ごはん

谷口文子

酔ふ友の姿はじめて星月夜

宮坂美緒

妻帰るまではひとつの秋灯

鈴木大輔

馬追や句点の如く本の上	加藤広文
毒茸を齧りて学ぶことの有り	大石高典
太蔓にてこずる夜長箆を編む	伊東弥生
初鴨の水尾寄り添うて水月湖	柳堀悦子
悪役の顔して林檎齧りけり	有岡萃生
庭石のいろの覚めゆく秋の雨	朝田玲子
雁や風吹き渡る三方五湖	加藤剛
かやぶきの風に揺れゐる蕎麦の花	田中白秋
菊膾苦手な子らはコロツケに	宮坂千種
錦秋や五湖それぞれの色を持ち	田辺美千代
絶景をもて遊ぶがに霧時雨	津嘉山典
若狭より粕漬の着く秋日和	牧田満知子
桐は実に風の育てる波頭	片岡和子
秋色の切絵めくなり北の国	田中勝
秋ぐもり湖面のごとき若狭湾	城戸崎雅崇
ふぞろひの有りの実ふたつ御裾分	幸城麗子